

アイデンティティから検討する
現在の乳幼児期の母親像

教育学部 社会科教育専攻

091113M

吹越 史江

はじめに

本論文では、乳幼児期の子どもを持つ母親のアイデンティティの変容について検討していく。そもそも、アイデンティティと乳幼児期の子どもを持つ母親を扱う背景には、1970年代以降に指摘された育児問題の背景に「母親たちの育児ネットワーク」があると1980年代以降指摘されてきたからである。そのような中「ママ友」と呼ばれる友人関係も成立し始めている。しかし今日では「ママ友」に苦しむ母親の存在が明らかになりつつある。また3・11のちに「絆」や「人とかかわり」といった人間関係の在り方に注目する傾向があるからである。

母親のアイデンティティはいきなり誕生するわけではない。それまでの、人生経験の中で得た結婚観・妊娠観に加え経済状況などの様々な要因の中で形成されてきたものである。若者文化を基盤にしたアイデンティティのとらえ方を用いて現代の乳幼児期の母親たちを検討する。

若者文化が現代の子育て世代に広く持たれているものとしてとらえ、その世代の人間関係のつくり方、コミュニケーションの取り方・価値観・ライフスタイルと言ったものに類似性があるものとして検討していく。

一方で、その母親像はより大きな社会経済的な諸条件の中に位置づけられているものであり、その面から検討すると母親像に多様性を生み出している。

このように、これまで「母親」「こども」「家族」「父親」といった「プライベート」なこととしてとらえられていたこと、特に「母親像」と「アイデンティティ」を軸に捉えなおすことで、これから一人の若者として「子育て世代」に突入する自らの指針としたい。

目次

第一章 母親像の変遷

第一節 母親像とは

第二節 「良妻賢母」の母親像の成立

第三節 民主主義な家族観～高度経済成長期（1950年代後半～1970年代初め）

第二章 現代の母親像

第一節 消費社会と現代の母親のアイデンティティ

第二節 ジェンダー論からとらえる現代の母親

第三章 インタビュー調査から見る現在の乳幼児期の子どもを持つ母親

第一節 先行研究により明らかにされている視点

第二節 インタビューから見えるそれぞれの母親像

第四章 考察 迷走する制度と立ち上がる母親たち

参考文献

おわりに

第一章 母親像の変遷

第一節 母親像とは

母親像とは「母親とはこういうものである」ととらえる考え方である。これは、そのときそのときの時代や文化によって異なるものである。もちろん個人単位のもつ「母親像」が存在するのだが、ある程度多くの人々に共有されることで自明視されていく。このように自明視されていくことで社会のなかにおいて「あたりまえ」のものとして浸透していく。社会への浸透が進むと、母親像は「こうあるべき」という母親規範をつくり出すこととなる。規範性が生じることで、その社会における母親たちはその規範に追従するか、離脱し社会から「異常」とみなされるかという道を進むこととなる。この規範性が守られることで社会における一見「普遍的な母親像」は維持されていくこととなる。

以上のように、母親像はその社会において一見「普遍的なもの」とみなされているが実際には時代・社会に起因するものなのである。

また、「アイデンティティ」の概念からの検討を行う。エリクソンによるとアイデンティティとは二つの一貫性でとらえる概念である。

一つは、個人の時間軸の中での一貫性であり、「過去」の自分と「未来」の自分とをつなぐ「今」の自己である。もう一つの一貫性は、本人が表現した自分像を周りの他者は「承認」するかどうかである。

第一章でとらえる母親たちは、明治期以前の「母親像」を規範とするか、富国強兵のものと「近代家族」の「母親像」を規範化していく。しかし、今日ではその「母親像」を正当化できる範囲が縮小してきている。(二章において検討する)。また「母親像」を選択する上での選択肢についても問われるようになり、母親像事体の構築ができないで悩む人々も多い。

今日において「一貫性」が現実的な選択肢でなくなってきたことで、「多元的自己」としての「母親像」が築かれていくようになる。

第二節 「良妻賢母」の母親像の成立～明治・大正期から戦中・戦後期～

●近代家族観の流入・ゆっくりとした浸透期

明治期は富国強兵・近代化政策のもと、「国家の子ども」としての側面が強調された。つまり、家族を国家の基礎単位として位置づけることで、子どもを「家の子ども」から取り出したのである。学校教育を補完・支える理論装置として「母性概念」が登場し、家庭教育の概念化を図っていった。その結果、衛生・医療を家庭で担う人財として母親が意識されるようになったのだ。このころから「婦人」という単語が登場し始める。この「婦人」こそ「近代家族」における母親像の始まりである。

つまり、資本主義的近代国家の展開に応じてのナショナリズムを育むための手段として母親が見いだされていったのである。国家の求める理想の母親像は、育児の科学的知識を得た「賢母」でありつつ、社会において活動する「婦人」であった。明治期には、現お茶

の水大学や日本女子大学が成立し「良妻賢母」のイデオロギーを伝えていく場が設けられていく。まだまだ少数派であったこの考え方を浸透させようと母親たちは、家庭と社会に「理想の母親像」を発信していったのである。明治期の一部の母親たちが、より良いものだととらえていた「近代家族」観を浸透させていくことは、賃金労働者・資本主義経済を育む基盤づくりに寄与していく。

天童（2004）は当時の育児雑誌の文章を検討し、「家庭」における育児の担い手が母親とみなされるようになっていたことを示し、さらに科学的知識を身に付けることが求められていたとしている。しかし一方で明治期には育児に「父親」の姿を見ることができるといふ。ただしそれは、育児は元来父親が行うのが適切であり母親は教育を通じて育児の知識を持つことによって、子どもへの愛情を啓蒙されるべき存在とみなされていたという「女性の社会的地位の低さ」の表れだとしている。

大正期に入ると、先の「良妻賢母」「婦人」が新中間層に浸透し始める。明治期との違いは、国家からの統制というより個人の価値観として受け入れられていったことである。その特徴として「子ども中心主義」があげられる。明治期には「国家の子ども」という枠の提示があった。しかし大正期の新中間層の子ども観は「家族にとっての子ども」「愛情の対象としての子ども」であり、子どもの私物化が進んだ時期だと言える。ここで筆者の言う「私物化」とは、「家族の子ども」ということである。江戸時代の「イエの子ども」でも、明治期の「国家の子ども」でもない新たな子ども観である。もちろん「イエの子ども」観も多分に残存している。また私物化とは「親の意のまま」にするという意味でもない。この時期の子ども観は子ども中心主義であり、親から切り離されたひとりの人格としてみなしていく傾向が強まる。

しかし、実際には「近代家族」観はまだ新中間層の特有の価値観と考えられていた。多くは「家父長制」のもと、家族の中の母親としての役割が強く求められていた。

大正後期、昭和初期には、都市における勤労者世帯が増加し始める。職住分離が進み、より一層の「近代家族化」が進んでいく。

●強い国家統制化の母親

戦中期の母親の役割は「国家のための母親」である。「産めよ増やせよ」という言葉に見えるように、戦争の戦力を求めていた。そのため母親の役割として「出産」が強調された。大正期の「賢母」像の「母性」「慈愛」がしだいに「良い兵士」を育てるために必要なものとして献身的な母親像に組み込まれていく。

つまり日本における戦前期の母親像は、当時の支配的なイデオロギーに対応して国家の一部に組み込まれていったことが分かる。強制されていたという側面はあるが、母親たちが明治期からつくられた国家の末端としての「家族」を保ち、子どもを出産していくことがそのまま国家の存続につながっていたと言える。

●民主的な家族を求める母親

戦後初期、「イエ制度」が廃止され女性に家族制度から法的に開放された。女性たちは、新しい民主的な母親像を求めていく権利を得たのである。確かに、戦前のような強い「あるべき社会・国家」像はなくなった。しかし、今度は当時欧米で主流の「近代家族」を体現する方向へ母親像は進んでいく。

第三節 民主主義な家族観～高度経済成長期（1950年代後半～1970年代初め）

●専業主婦の登場前夜

日本では、戦後の経済の高度経済成長期に「専業主婦」が登場する。当時は、第一次産業から第二次産業へと産業構造が大きく変化した時代である。農業等の自営業から企業へと生産主体が移っていく中で、多くの労働者が登場した。さらに、いわゆる「日本的経営」は、性別役割分業体制を基盤としたものであったため、専業主婦が登場する基盤が造られていったといえる。

大正時代には新中間層という一部の特権階級のみが得ることができた家族形態は、戦後産業構造の変化によりより大衆が受け入れることのできるものとなった。さらに戦後進められた民主化は「両性の平等」のもと配偶者の選択・夫婦関係における封建的価値観から解放されていく。ただし、当時の「新しい家族」は「近代家族」であり性別役割分業を自明としていた。さらにこの時期には、敗戦による生活水準の低下・扶養家族の人数の軽減が労働者の生活の質的向上に不可欠であるという考えのもと、人口抑制政策も打ち出され家族像の均質化が進んでいく。（この時期の人口抑制は激変期であり第二章第一節にて出生率の変化を取り上げる。）高度経済成長期の産業転換と合致し、「子ども中心主義」の「友愛」「民主的」な家族が実現していった。

戦後の民主化の中で、たびたび日本の「イエ制度」が問題視され、新しい家族観がもたらされた。しかし、それは性別役割分業・子ども中心主義という現代から見ればジェンダー問題を内蔵する家族観であった。戦後の復興期において、多くの女性は労働者となり必死に働いていた。大正時代から引き継ぐ「家族像」・「母親像」は頑張れば実現できる距離のものとなっていた女性たちは、「あこがれ」を持つようになっていく。

当時の価値観・社会情勢は国の方向性をも決定した。1960年代には、雇用者の妻を被扶養者として税制上などで優遇する制度が導入され、家庭中心の既婚女性の被扶養化・主婦化が政策的に導入された。1961年には保育所は児童福祉施設として「救貧」の役割を担い、幼稚園は「幼児教育」を行う施設として位置づけられた。さらに1963年には、中央児童福祉審議会から答申が出された。その内容は、限られた財政の枠では経済状況に恵まれないなど保育に欠ける子どもを優先するしかないという見解であった。特に2～3歳以下は家庭での保育が原則でなければならないとされた。これが「三歳児神話」を助長したとも言われている。こうして「新しい家族」像の価値観が「新しい家族」を基盤とする制度を生み出し、人々の画一的な家族像をさらに強化されていくというサイクルを生み出したのであ

る。

●専業主婦があたりまえ

当時の社会構造・家族構造の変化に注目して「家族の戦後体制期」（1955～1975年）を提唱したのが落合（1993）である。その特徴は、既婚女性の専業主婦化（出産・育児期の女性労働力率の低下）・二人っこ化（産育数の減少）・人口学的移行期における核家族世帯の増加である。

企業を中心とする産業構造・日本型賃金雇用・母親たちの「近代家族」を望む価値観の浸透など、戦後の10年をかけて社会の土壌が造られていった。

賃金労働者が増加することで、人口が都市に集中するようになる。性別役割分業を前提とする都市コミュニティの中で育児の負担は母親に集中する。1960年代になると、科学的知識をベースとする医学的知識と、伝統的・慣習的な育児知識が混在していた。このころから、育児書・育児雑誌が注目され始める。このことは、母親たちの子どもの衛生・教育・しつけへの関心が大衆化してきたことを示している。これは子ども中心主義の大衆化と言えるだろう。

1970年前後の育児雑誌の登場期は、戦後のベビーブーム世代が出産・育児を迎える時期である。育児雑誌が登場した背景には、戦後の高度経済成長期を経るなかで、育児に係る環境・もの・人々の価値観が大きく変化したことが挙げられる。先行世代の育児経験は必ずしも役立つものとは言えないという思いを持ち、必死に情報を集める母親たちが育児雑誌を求め育児雑誌によって「あるべき母親像」が強化されていった。また岩村（2005）は、食生活の変化から、どんどん変わりゆく社会に適応していくことが求められている当時の母親たちの「焦燥感」を見いだしていた。

ここで、育児書と育児雑誌の違いを考察すると次の点を想起できる。育児書は、医学・心理学等専門的な育児知識が書かれている。一方で、育児雑誌は内容が分かりやすく読者の共感を得やすい身近な話題を選択しているものが多い。当時は、若い母親の育児不安を解消して安心感を与える具体的な情報として用いられていた。

天童は『ベビーエイジ』という当時人気のあった育児雑誌から次の読者投稿欄を引用している。「子どもには十分な愛情を注いでやりたいし、夫にも出来るだけのことをしてあげたい。そして、私自身もいつまでも気持ちを若く、現代から取り残されないよう世の中にもきよろきよろと目を向けていたい」（70年8月号）

この時期は、「正しい育児」の在り方も追及されていた。研究の際にも①乳幼児期の親子関係に重要なのは母子関係である②親子関係において親は子どもに一方向的に影響を与える存在であるという価値観が内蔵されていた。「夫は外で稼ぎ、妻が家事・育児」という性別役割分業が当たり前のものとしてとらえられ、「良妻賢母」を理想の母親像とする専業主婦たちの悩みが家族の中に埋没してしまっていた時代である。天童の引用は、そのような時期に「自己実現を求める母親像」を見いだすことができる貴重な言葉である。

第四節 母親像へのアンチテーゼ～1970年代後半～1980年終わりまで～

●子どもから「母親」を対象化した時代

1975年をピークに専業主婦は減少が始まり、主婦の就労が増大するようになる。これは、高度経済成長が終了し男性労働者の大幅な収入の増加が見込めなくなったことで、既婚女性がパートタイム労働に従事することが増加したからでもある。また、専業主婦であっても他者からの承認を求め、就労やボランティアをする女性が増加する時期でもある。

1985年には「女子差別撤廃条約」を批准し、翌年には「男女雇用機会均等法」が施行され、女性の社会進出が注目される時代となる。女性の高学歴化・晩婚化が進行し始める。雇用労働の場において男女平等の追求が始まったのだ。しかし、女性は就職しても結婚前までで家庭に入ることが当たり前ととらえられてきたため、就労か家庭かの二者択一を迫られる時代へ入っていく。

フェミニズムや歴史社会学が「1970年代の家族・母親像の理論・思想」の再検討へ進む起爆剤となる。母親自身に注目し、育児不安や育児疲労・ストレスなど母親が陥るネガティブな状況へ焦点を当てて社会的要因の解明が進められる。母親自身の問題ではなく社会の問題としてとらえられるようになり、母親の育児を支えるネットワークの広さや深さ、母親が家庭外の社会との接点を持つこと、自己実現や自己表現をする機会を持つことが育児不安を軽減する効果を持つことが明らかとなっていく。このアプローチによって女性たちは、「母親」以外の「自分」を意識化するようになっていく。

●逃れられない葛藤

1980年代には、これまでの母親像に縛られないことが重視され始める。またこれまでの閉鎖的環境が育児不安をつくり出していると考えられ、「ママ友」をはじめとするネットワークづくりが推奨されていく。しかし、母親たちは自らの孤立化を予防するためのネットワークづくりでかえってストレスを生み出している傾向が生まれていく。

この時期の特徴は、「良妻賢母」的な母親像はまだ強く社会に根付いており①就職しても、結婚・育児期において「仕事か家庭か」という二者択一の状況においこまれる②再就職はパートタイム・非常勤を中心とするなかで、「雇用労働」と「家事労働」の二重負担に悩む母親が登場し始める。

1970年代までの母親像への批判的傾向を見いだすことができるようになり、「子育てしても、一人の女性としての生き方を捨てない母親」が女性の理想像として成立し始める。「良妻賢母」的な母親像に抵抗感を感じて、「自己」犠牲が生じる育児にはあまり魅力を感じなくなっていく。自己実現への欲求が、「良妻賢母」的な母親像と子どもとの間で大きなジレンマを生み出され、その結果、アイデンティティがゆらぐ状況が生まれ、自己決定の困難さが生まれていった。

さらに、母親だけでなく「父親の家庭からの疎外」とも捉えられるようになっていく。

小括

私たちが、普遍的だと考えていた家族像（家族愛・プライバシーによる公私の区別・夫が稼ぎ手で妻は主婦という性別分業・子どもへの愛情と教育関心等）は「近代家族」という家族像のひとつにすぎない。明治期から戦前までは、国家イデオロギーにおいて主婦像が統制されていた。主婦像の浸透期ととることができるだろう。戦後の産業転換が大きく進む中で大衆に「民主的な家族」が受け入れられていく。日本の「イエ制度」と重なり、母親が愛情を注ぐことが普遍的なこと考えられる。これは個人の価値観として広い浸透を見せたからだろう。

以上のように「良妻賢母」的な理想の母親像に、挟まれその時代ごとに葛藤する現実の母親たちが数多くいたことは明らかである。

第二章 現代の母親像

第一節 消費社会と現代の母親のアイデンティティ

1980年後半以降の社会の変化によって「母親像」も転換期を迎えた。それまで普遍的ととらえていた「1970年代の母親像」の解体が進む一方で、「新たな母親像」が成立していく。しかし、この変化の過程ではかつての「標準化」が強すぎた故の弊害が生じる。例えばかつての「母親像」への固執傾向や「新たな母親像」への社会的評価の低さ、女性の就労における男女不平等さなどが存在する。高学歴化・未婚化・晩婚化が進行し、女性の「社会進出」が進んだ一方で、出産・育休を機に退職する女性も多数存在する。1990年代初めごろまでは、「就労」か「結婚」の二者択一の状況が続くのである。

ジェンダー論の進展も進み、女性の「選択肢」は多様化したように見える。しかし日本の母親規範は想像以上に根強い。1990年代の女性は、自己選択と自己責任の中で「母親像」を築いた。それは新たな葛藤を内蔵する一方、自己責任論の中で「社会」の中に埋没していった。

●アイデンティティの変容

1970年代までのアイデンティティは二つの「一貫性」でとらえることができた。しかし消費社会という「流浪の社会」の中において、アイデンティティの形成方法が変容してきたのである。浅野（2008）が指摘する「状況志向」とは「個々の関係の中でうまくやっていくためのよりどころをその都度見いだしていくこと」だという。このとき重要な感覚は、関係のはかなさへの敏感さとそのもろいものの中に少しでもよりどころたりえるものを見極める感覚・複数の状況を切り替えながら関係を管理する感覚である。

この二つの感覚の調整が得意でない若者は「浮いている」存在になる可能性を内包している。そのような人々にとって社会は息苦しい居場所がないと感じるだろう。

このような社会においては、「多元的自己」というアイデンティティの形成方法が浸透していると言う。特徴として①状況に応じて使い分ける複数の自己に一貫性を要求する傾向が低下している②複数の自己を統合するための高次の視点が多元的自己には存在しないということが挙げられるのだと言う。

●1985年前後から1990年代半ばの母親像～バブル景気が支えた母親像～

1986年には「男女参画社会基本法」を目指した「男女雇用機会均等法」が施行される。これによって女性は男性と同じ「賃金労働者」になる上での「男女平等」が求められるようになる。このように1980年代後半からの10年余りの時期の特徴は、母親たちの「家族の戦後体制」モデルからの脱却を目指す時期であった。男女ともにライフコースの多様化が肯定的に捉えられていた。この時期は、「進歩」が前提であった近代への反省を含む考え方が浸透していく。「物の生産」に価値の中心の生き方への否定的見解も生み出されていく。バブル景気の余韻が残っていた1990年代半ばまでは、制度化された社会への対抗として消費社会が肯定的であった。

女性たちの中にも、みなと同じような生き方を追求するのではなく、自分らしさを大事にすると言うことが「自然で望ましい」ととらえられるようになっていく。

妊娠・出産も選択肢としてとらえられていく一方で、女性の雇用環境は一向に改善されていかなかった。「自発的に」妊娠を機に退職し子育てに専念する母親も見受けられるようになる。「自発的」選択で「母親」になる一方で子どもとの距離が近すぎて、新たな育児問題も取り上げられるようになる。

このような中で「母親」以外の「自分らしさ」を求めていく傾向はもはや自明化されていく。しかし1990年代には「1970年代の母親像」を否定しながらも「母親が子どもの世話をするのは当然だ」という母親規範が色濃く残っていた。メディアでは、キャリアウーマンを肯定的にとらえ、制度の充実を進めるよう取り上げていたが実際には「就労」と「結婚」は二者択一状態であった。

さらにこの時期になると労働市場に大きな転機が生じる。いわゆる日本型雇用の解体である。非正規雇用・年俸制・成果主義を取り入れる企業も増加し、日本の企業も雇用システムの根本的見直しが進むこととなる。

①非正規雇用者労働市場への滞留者が増加

②企業が少数尖鋭方式によりスキルを学ぶチャンスに格差が生まれる

このような結果、フリーターや派遣労働者などの非正規雇用者の「ワーキング・プア」化の進行、大学・高校への人材育成の要請が増加等を生み出した。

男性の収入の格差が広がるなかで、男女ともに「結婚」への二の足を踏むようになり、出生率の低下も拍車がかかっていく。

●さらなる消費社会の進行とアイデンティティ

1990年代後半から現在に至るまでの「母親像」を検討していく。女性の理想のライフイベントは多様化した。例えば、保育園や幼稚園の保護者の年代も20代から40代まで幅広くなったし、今や待機児童の問題で保育所に子どもを預けられる母親は他の母親からうらやましがられるという状況になっている。かつてのように「幼児期は母親の手で」という観念がなくなったかのように見える。

このように一見、多様な選択肢が設けられ、個人の好みと選択の結果であるように見える。しかし、先に述べた雇用形態による賃金格差による富裕層と貧困層の成立や核家族か親族による支援を受けられるか、夫が家事育児を分担してくれるかなど様々な観点における豊かな層とそうでない層との間で状況がずいぶん異なっている。

さらに、現在の「子育て期」である20代から40代は1970年代から1990年代前半までに生まれた人々である。今の40代はバブルを学生時代に経験した人々であり、標準的な枠組みの中で育てられながら大きな変革の時代を生きてきた人々である。また現在の20代は消費社会の中で生まれ育った世代である。『個性的』であり、自分らしくあること、そして何事も自分自身で判断することを求められる自己責任という観念のもと育ってきた世代であると言えるだろう。

消費社会の中では、物・サービス・安さ・スピードが追究されてきた。テクノロジーの進化によって、今日では母親像の形成まで自在化してきたのである。

しかし自らの「母親像」を持てるようになった女性たちはかつての母親たちよりも自由なのであるだろうか。

第二節 ジェンダー論からとらえる現代の母親

●消費社会における母親像

消費社会は母親像にどのような影響を与えるのだろうか。

第一に消費の世界において、文化は母親が他者とコミュニケーションを取る際の重要な土台を提供している。たとえば、子どもとアニメについて話すこともあるだろう。夫と同じスポーツが好きかも知れない。ママ友とは子どもをきっかけではなく、同じ音楽家をきっかけに出会ったかもしれない。このように、「文化」を軸に同じ関心を共有してつながっていくためのきっかけが消費社会にはあふれているのである。

第二に消費文化を通して母親たちは自分自身をかけがえのない存在へと形成していくのだ。母親は自らの母親像を、消費文化を基盤にコミュニケーションを他者と取るなかで作っている。したがって自らの「母親像」という自己アイデンティティも消費文化によって支えているといえる。

消費社会・情報社会が進展した現在では、物質的な欲求を人々はある程度満たしている。物質の質だけでなく、安さやスピードといったサービスの質までも重要な時代となっている。さらに、母親たちの子育ての方法・家事の進め方・達成度・友人関係の在り方も多様化したのだ。

このような社会において、現在の母親たちは自らのアイデンティティを保つために「母親」と「妻」「社会人」等役割に応じて自己の使い分けをする傾向がある。現在の子育て世代は多かれ少なかれ『個性的』であることを求められてきた世代である。自分らしくあること、そして何事も自分自身の判断でその責任を負う主体であることが求められてきた。しかし1990年代でも「1970年代の母親像」は色濃く人々の母親規範として残存していた。子育ては母親の責任であるという社会的規範は画一的母親像である。そのような中、母親像にアレンジを加えることや母親以外で個性的な自己を持つとする流れが進行した。育児雑誌をはじめとするメディアから「母親だけではない自分」が求められる中で、日本の母親たちは「子育て」を消費社会化させていった。一つ一つの選択が、子どもの人生に直結するものであると感じ、その責任に迫られる母親たちが登場した。いわゆる「パーフェクト・チルドレン（学力だけでなく心も豊かな子ども）」を育てることが多元的自己のひとつである「母」への偏りが大きい日本においての「自己実現方法」であった。子どもの成功・失敗が自らの成功・失敗のように感じる母親が指摘され始める。

本田（2008）では社会からの母親規範という抑圧によって、自らの母親像をパーフェクトにこなさなければならないという感覚を女性に抱かせる影響を示している。女性に子どもを持つことを躊躇させたり、子どもをいったん持てば就労から撤退することを選択させている可能性があることを質問紙調査データの分析から示している。

近年、20代から40代の女性の性別役割分業「夫が外で稼ぎ、妻は自宅で主婦をするのが望ましい」というデータで回帰傾向がみられるようになった。これは、消費社会の浸透がますます進んだ結果だととらえることができる。消費社会が浸透してくるに伴って、職業選択において「好きなことを仕事にしたい」という態度が生まれてきた。日本において「1970年代の母親像」から生まれた母親規範は現在でも根強く浸透している。「3歳ごろまでは母親が子育てを中心的に行うことが望ましい」と女性の約8割が考えているという。企業（職場）においても家庭においても、ジェンダー的不平等は多数残存している状況がある。このような中、「自発的に」仕事を辞めて「主婦」という選択をとる女性が戻ってきたといえるだろう。1990年代初頭からの長い景気低迷の下、若者の労働市場は急激に縮小していくこととなる。この状況において女性は男性以上に厳しい状況に陥ったことは言うまでもない。しかし、主婦を選択するという事は、夫の雇用体系に依存するという事でありある意味でいわゆる「夢追い型フリーター」と似た側面があるのではないだろうか。「母親」というやりたいことを選択したはずなのに、思い通りにいかない子育てと外部からの評価を得にくい育児・家事をこなす中で、母親たちはある意味過酷な労働環境に自らをあてはめてしまったといえるのかもしれない。しかし、生計は夫が支えてくれるために「就労」への「自分らしさ」「やりがい」を求める傾向が強くなる。その中で、「母親」への自分らしさの追求が強まってきているといえるだろう。

さらに自らの「賃金」獲得がないことで、社会人としてのアイデンティティを保つことが難しくなっていく家庭に閉じ困っていく傾向があるというのはこれまでの子育て支援に関

する研究で明らかにされている。

●ジェンダー論と母親の子育てネットワーク

母親の研究にはいくつかのアプローチがあるため筆者なりに整理する。大きく分けて次の4分野があげられる。

①歴史学的手法から母親像を意識していく手法

②母親の心に焦点を当てた手法

③母親のライフコースに着目した手法

④母親をとりまく環境に焦点を当てた方法

I 父親 II 祖父母 III 地域環境 IV 職場環境 など

⑤子育て支援制度やその実践における研究

①はおもに1980年代のジェンダー論の発展期に取り上げられた。その後②に焦点が移っていく。③においては高学歴女性の専業主母への研究が進められている。

自己実現や就労・子育ての両立をめぐる葛藤が、子どもの為に仕事をやめた時点と子どもがある程度成長して再び仕事を考え始める二段階において集中的に表れることを示している。特に、高学歴の母親の場合、結婚・出産までに大企業の総合職・準総合職として勤務していたり、専門職として仕事をしていたりと職業に対する「やりがい」を感じていることも多い。

井上（2011）は高学歴の母親たちへのインタビュー調査から選択肢の多様化や自己決定の論理の強調によって「専業主母」を選択した女性たちの葛藤を自己責任の問題として社会から見えづらくなる構造が強化されていくことを明らかにしている。

これは、今日のアイデンティティが多様な役割を選択できることで自分を支えているという側面があるにもかかわらず、実際には社会的規範と化した「1970年代の母親像」からの圧力によって、自らの「母親像」を内心以上に社会規範に近づけ、一方で「労働者」として（特にやりがいなどがあり、役割として重要であったととらえる女性ほど）の自己を選択できなくなったことで葛藤が生じるようになったのである。このような母親は、だからこそPTAの活動や地域の活動に積極的に参加する傾向があるのも、母親をきっかけにしながらも新たな自らが社会から承認される場を構築しようとしている動きだととらえることができるだろう。

●母親の周囲の環境

母親を一人の主体とみなす価値観は今日、母親像を検討する上で自明的にとらえられるようになってきた。その一方で「父親像」の研究も盛んになっていく。そこでは父親も「1970年代の母親像」にとらわれていることが明らかにされてきた。

大和（2008）による研究では、今日の父親たちが育児ストレスが生じる状況を次の4

点にまとめている。第一に「育児は母親の仕事」と思いながら育児に関わらざるを得ない状況の中で育児負担感が生まれている。第二に育児をしたいと思ってもかかわらずし、仕事の為に育児に関われない状況の中で、仕事と育児の葛藤が生じ育児意欲の低下を示している。さらに父親歴が浅く、育児に不慣れな状況の中で「育児疎外感」が生じている。第四に、父親歴が浅く、育児は母親の仕事と思い込み、子どもと二人きりになる機会が少ない状況において父子関係に対して不安感が生じている。

大和の研究から「イクメン」をはじめとする「子育てする父親」が望ましい父親像として受け入れられていく中で、父親たちの中に存在する「性別役割分業」の規範から逃れられず父親自身のアイデンティティの面の問題と、社会的要因からの葛藤が生まれていることを明らかにしている。

父親だけでなく、祖父母との関連を見ながら育児援助ネットワークに関する研究も進められ今日では多くの子育て支援センターも誕生している。バリエーションも多様化しているが、そのような中社会において日本において家族ケアが規範化していて他人にケアを頼むことに慣れていないという現状が明らかにされている。

●子育て支援制度とワークライフバランス

少子化を問題としてとらえるようになった政府は1990年代以降マクロな子育て支援政策を行っていく。一方で、保育士をはじめとする子育て支援の実践当事者たちの意識に注目するミクロな研究も増えている。

家族政策研究では、保育所の「保育に欠ける子ども」という入所条件や母親の就労との関係性に注目するものが多い。

井上（2008）が指摘するように、一時保育事業の利用要件の変化の中に「専業主婦への子育て支援」という政策課題の浸透がジェンダー秩序（一つは1970年代母親像へ回帰すること）を促進することを指摘している。

ミクロな研究においては、大日向のファミリーサポート実践が挙げられる。彼女のエッセイからは「子育て支援をする人々」が自らの「母親像」との葛藤を見て取ることができる。リフレッシュの為に毎日子どもを預けに来る母親に対して批判的に捉えている支援者側のまなざしと向き合っていた。

以上のように、今日では「母親である女性個人」への関心がかなり高まってきていることが分かる。その中で、日本における「1970年代の母親像」がいかに今でも規範となり浸透しているかを見て取ることができる。現在の女性たちの抱く「母親像」は母親規範が多聞に内蔵されている。社会の激変の中で、母親たちのライフイベントの一つとして子どもをとらえる姿も明らかにされている。子どもの存在が自らの人間的成長の糧であることととらえることで社会の母親規範と自らの母親像のバランスを取っているのだ。

しかし、一見「自己選択」としてとらえられることで日本の乳幼児期の母親たちの約 7

割が一度「専業主婦」になる現実を生み出し、企業の子育てに関連する制度が硬直化してきた側面は否めない。

さらに、政府の掲げた「ワークライフバランス」が新たな母親像をつくり出している点に注目したい。ワークライフバランスの理念は、「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会」を目指すことだとしている。

しかし、現状では日本のライフコースが多様化したとは決して言えないであろう。自らの中に内在した母親規範の根強さと社会の「母親像」は女性に出産を機に退職する圧力を生み出している。

ジェンダー論の発展により、「母親である女性一人一人」というとらえ方が強まってきたと言えるだろう。さらに消費社会の中でのアイデンティティとして「母親規範を色濃く残す母親像を持ちつつも他にやりがいのある役割をたくさん持つ自己」が必要とされてきている。

第三章 インタビュー調査から見る現在の乳幼児期の子どもを持つ母親

第一節でこれまでの先行研究の中でとらえられている母親の育児不安・不満を軽減する要因を取り上げる。第二章においてはインタビュー調査の中で見受けられた現在の母親たちの特徴を検討していく。

第二章までに「母親以外の自己」を求める傾向が強くなっていることを明らかにした。一方で母親像は規範意識を強く残していることも明らかにした。ジェンダー論の中では、「男女ともに働き、男女ともに家事・育児をする」ことを理想とする中で、母親以外の自己=就労のイメージが強く与えられている。今日の乳幼児期の子育てにどのように関わっているのだろうか。

第一節 先行研究により明らかにされている視点

これまでジェンダー論と子育て支援に関する研究が数多く行われそこでは、母親を取り巻く諸条件があげられてきた。主として家族社会学において明らかにされている傾向をまとめる。

●父親の子育て観

日本では、欧米と比較し家事・育児時間が極端に短いことが明らかにされている。そのなかでも父親は家事よりは育児の参加率が高い。育児に参加する父親たちが育児をする主観的理由を検討した内田（2001）の調査によると次の傾向が見て取れた。専業主婦と方働きの父のカップルの場合、父親の育児をする理由は子どものしつけ・教育であるととらえている。動作としては、子どもと遊ぶことが中心であり、仕事からの解放感として自己アイデンティティを保つことが中心となる。家事へは非協力的であることが多い。一方で共働

きの父の育児理由は、子どものために加え「自己成長」の手段ととらえていた。更にパートナーのサポートという側面も持ち、おむつ替え等の「世話」に関するところも方働きの父親より積極的である。

●母親像の検討

「1970年代の母親像」が今日の母親規範として根強く残っている。今回注目した観点は、

- ①子育ての責任は母親が担うべき
 - ②自分の楽しみを我慢しても子どもの側にいるべき
 - ③生みの母親ならば当然子どもを愛せるはずだ
 - ④しつけの責任は母親にある
 - ⑤就学前（特に三歳以下）の子どもを預けるのはかわいそうだ
- といった観点である

第二節 インタビューから見えるそれぞれの母親像

今回インタビューを行ったのは7人の乳幼児期の母親たちである。彼女たちはそれぞれの環境で子育てに日々励んでいる。今回は育児に肯定的な母親たちを取り上げた。これは、近年子育てに関する諸問題が社会問題として取り上げられ、中には子育てに対してマイナスイメージを強く抱く人々がいることを知り、今日の子育て環境を知ってほしいと言う思いから取り上げた。

まず現在子育てを上手くいっている人々の共通項や特徴を検討することで、どのような支援が必要なのかを考察する。

●調査方法

アンケートとインタビューを通して、その人が抱いている個人的「母親像」をとらえているのかを検討する。さらに、育児に対して肯定的か否定的かの検討を「本人の就労状況」「パートナーのサポート」「その他のサポート」「家計の収入状況」から検討していく。

●調査対象

筆者が「乳幼児期の子育てに関わる母親」を条件に知人の中から依頼した。

A (28) B (30) C (28) D (40) E (36) F (22)

●調査対象のライフストーリー

A (20代後半) さんのあらまし

Aさんと筆者のつきあいはもう一年になる。大学の学園祭に遊びに来ていたAさんと出会って1～2か月に一回Aさんのお宅に遊びに行かせていただいていた。息子さんがお散歩できるようになってからは、一緒にお散歩に出かけたり、カフェでお茶をしたこともある。

これまでの交流に加え、2月15日に追加調査を行う。10時30～13時30の三時間二人でお話をさせていただいた。（お子さんはお昼寝中であった）

・本人の就労状況

専業主婦。かつては東京で正社員として働くが、結婚を機に退職した。

・結婚からの年数

3年目

・家族構成

夫（20代後半）・本人・男の子（1歳7か月）の3人暮らし マンションに住む
夫は小学校・中学校の幼馴染であり実家が近い。

・夫の職業と年収

大学院卒業後、研究職として働く。

年収は「ノーコメントだけど、客観的に見たら悪くないと思う」とのこと。

残業もあまりなく、帰宅時間はある程度一定である。

休日はバスケットボールを知人と楽しんでいる。

・夫の家事・育児強力

妻から見て、協力的であるという。

泣き止まないときは、子どもを連れて外に散歩に行くこともある。

おむつ替えは、あまり上手ではない。協力しようとする姿勢がうれしい。

家事はあまりやらない。お願いすれば手伝ってくれる

・交友関係

夫婦とも中部地方の同県出身で、夫は大学時代の知人が多少近くにいる。

Aは宇都宮に当初は知り合いは一切いない状況であった。

子どもをきっかけに出会った知人20人と親交がある

・母親像

母親規範が強い。しかし分野を問わず人々と関わるのが得意で交友関係を広く持つ。

子育て以外に今の自分に何ができるかを考えている。

筆者と出会った一年前は、就労意欲が高く、今後の就労への葛藤を持っていた。

現在では、子ども中心としながらも日々の生活を楽しんでいる。

誰かに影響を与えられる人生を目指したいと、常に社会のなかの一人でいたいという。

B（30代前半）さんのあらまし

Bさんの夫が、筆者のサークルの先輩である。私は直接会ったことは一度しかないのだが、Bさんの弟さんも同じサークルであったと言う。Bさんとその旦那さんとは、一緒にサッカーの試合を見に行ったり、バーベキューをしたりとサークル関係の友人を含めた付き合いがあった。今回のインタビューの為にBさんの夫にメールを送りBさんのアドレスを教えていただきアポイントメントを直接取る形式をとった。

2月12日13時～17時ごろ Cさんも一緒にBさんのお宅で行った

- ・本人の就労状況

専業主婦。地元で栄養士として短大卒業後一年間働く。その後営業職をする。

弟の知人の夫と出会い、結婚を前提に同棲を始め、営業職を辞し同棲先でパートタイムとして働く。

- ・家族構成

夫(28)、本人、女の子(3か月)の核家族。

Bさんの実家は福島で夫の実家は栃木県高根沢市(車で30分以内)である。

夫の実家が近く「適度な距離」と考えている。何かあったときに安心であるという。

- ・夫の職業と年収

大学院卒業後、線路整備士となる。年収はノーコメント。

日勤・夜勤という不規則な側面がある。

- ・夫の家事・育児強さ

おむつの交換やお風呂などタイミングが合えばすごく協力的であるという。

現在朝食を作れない状況でも、文句を言わない寛容さもあるという。

ただ最近、言葉の端々に「家にいるのは楽、子育ては楽」という含みを持つ言葉がでる。

今回のインタビューを通して夫の「母親規範」がBさん以上に強いと思うという。

- ・交友関係

出産を機会に数人のママ友ができる。しかし、連絡を頻繁にとるわけではない。

夫の大学時代からの交友関係が幅広いことから、そこで知り合いを得る。

大学時代の交友関係から広がったのがCさんとの出会いである。

夫を中心とした中で、新しい人間関係が広がった。

- ・母親像

母親が子育てを一人で担うことには否定的であるが、家族の幸せを一番に考えたいと思っている。「三歳児神話」は否定的で預けて働いても良いと考えているが、夫が三歳までは家で育ててほしいと言っており今後は未定状態である。子どもを生きがいととらえ、母親であることを充実させていきたいと考えている。

まだ子どもが3か月だから、子ども中心だけで周りを見れるようになりたいと考えている。

C (20代後半) さんのあらまし

Cさんもサークルの先輩である。しかし今回が初めての交流である。Cさんの夫もBさんの友人であり筆者のサークルの先輩である。しかし筆者はお会いしたことはない。今回Bさんがインタビュー「面白そう」と感じたらしく、声をかけていただいた。Bさんと同時並行的にインタビューを行った。

これを機にアドレスを交換しまた落ち着いたらお茶をする約束を取り付けた。

・本人の就労状況

専業主婦

留学から帰ってきて秋卒業をする。夫とは大学卒業時に婚約しすぐ同棲を始める。

大学を卒業後、県内の高校の英語講師として働く。

一年で講師をやめる。その後は主婦業を中心に、派遣アルバイトとして働いていた。

・家族構成

夫 (20代後半) ・ 本人 ・ 女の子 (11 か月) の核家族。

夫の実家は群馬・Cさんの実家は熊本である。

佐野付近に引っ越しを検討中である。(夫の実家まで車で30分程度になるので)

・夫の職業と年収

大学卒業後、地方公務員となる(研究職)。

時期により残業もあるが、定時に上がることが多い。

年収はノーコメント

・夫の家事・育児強み

子どもが生まれる前から育児本を読み、子育てについて研究していた。

育児本の「妻を認めてあげる」を実践しようとしている。

「Cはえらい。頑張っている」と日々声をかける。

家事・育児をしたときの「やってやったぜオーラ」を出すのがイライラするという。

家事・育児を内心どのように捉えているかはわからないが、自分のできる範囲でいろいろやろうとする姿がみられるという。

・交友関係

大学時代の友人に数人子どもがおり、ときどき遊ぶという。(Bさんの旦那さんがCさんの大学時代の友人である)

インターネットや友人の話から「ママ友」に違和感がある。

無理しなくていいのにとと思う。適度な距離の友人(Bさんのような)が欲しいと言う。

これから幼稚園などに進むにつれ、子どもの友人をつくるために「ママ友」というしがらみに入らなくてはならないのかなと少し不安を持っている。

・母親像

自らの母親が英語教師であり、保育園に朝から晩までいたことを覚えている。「働く母親」よりも、できることなら「一緒にいられる母親」になりたいと言う。自らの母親を反面

教師として、自分の中に「母親規範」が強く作られている。

一方で、生きがいは「他人に認められること」として子育てを「育自」だととらえている。自分の成長のためにも子育てを楽しく行いたいと言う思いが強い。就労に対しての強い思いよりは、母親業を中心として、どうやったら周りも自分も愉しめるかを検討している。

D（四十代前半）のあらまし

筆者が学童アルバイトで長女（7）と関わりがあったこととお迎えの際にいつもお話をしていたこと、さらには保育士関連で指導を受けたことがあったことで今回のインタビューをお願いした。

2月13日 11時から 13時

- ・本人の就労状況

大学教授

- ・家族構成

夫（40）・本人・娘（7）・娘（3）の核家族。夫は単身赴任中であり、平日は母子家庭状況である。休日は家族4人で過ごす。

- ・夫の職業と年収

大学教授

単身赴任をしているため、土日のみ子どもと関われる。

- ・夫の家事・育児強力

もはや分担という概念はない。休日には子どもの相手を頼み、週末に家事をこなす。

不満は特にない。むしろ子育てに関わりたいと思いつつ関わる時間が少ない夫に同情するという。

- ・交友関係

長女の保育園時代にできた友人関係が大切。病気になったときお互いに預け合う。

仕事に関わる人間関係が多い。

公園デビューもしていないため、「ママ友」はいないかもと感じている。

- ・母親像

「性別役割分業」は頭がない。専業主婦で姑との関係に悩む母親を見て育ち「専業主婦になる」という選択肢は自らの中になかったという。しかし、自分のことを自分でこなすという育て方が間違っているとは思わないし、それでいいとも思うが、いい意味での大人の手が足りない＝かわいそうと感じてしまう時がある。だから今年の目標は「手の込んだ手料理をもっと作ること」と「母親規範」を持ちつつも「自分なりの母親像」を持っている。

仕事は「やりがい」のあるものであり、どちらも中途半端だけとおかげで切り替えができてどちらも愉しめると言う。

専業主婦のイメージは「立派な人たち」だという。人のペースにあわさざるを得ない時

間が長すぎるのは自分には厳しいと言う。

E (30代後半) さんのあらまし

子どもと関わる機会を求めてベルモール近くの公園に休日出かけた際に男の子(8)と出会った。一人で遊んでいたため、一緒に遊んでいたらEさんの夫が息子を迎えに来た。気さくな方でお話するうちに、奥さんとお話ししてみたいという私のお願いを聞いていただき公園に呼び出していただいた。半年前に出会い、数回お子さんと遊ばせていただいた。いつも一緒にベルモールでお買い物をしたり公園で遊んだりする。(休日のみ) お互いのだいたいの家の場所は知っているがお宅まで伺ったことはない。電話番号とメールアドレスを知っている関係である。

今回もベルモールのフードコートで一緒にお昼を食べながらインタビューを行った。

2月10日 12時~15時

・本人の就労状況

正社員(銀行員) 短大卒業後ずっと勤めている。二人の子どもとも育休をとる。育休をそれぞれ一年取得し勤務に戻る。子どもは保育園に預けることが可能であった。

・家族構成

夫(36)・本人・男の子(8)・男の子(4)の核家族。

夫婦ともに栃木出身でどちらもそれぞれ車で30分以内のところに実家がある。

・夫の職業と年収

販売営業職であったが体調を崩して一時期入院し、現在は別の会社の経理をしている。お互い、家計は二人で支えていると感じていると考えている。転職して5年目である。

・夫の家事・育児強力

営業職時代は一切なしであった。帰宅時間も遅く、週末も寝ていることが多かった。現在では、協力的になり主に子どもの遊び相手になってくれるという。家事もお願いすれば協力してくれるという。

・交友関係

地元のため、昔ながらの友人が数人いる。子どもの年齢はばらばらであるが気心が知れていて必要であるという。

保育園保護者同士の関係では、直接会う機会も少なく、悩むことはない。お互い大変だという雰囲気があるという。

・母親像

働くことに長男を生んだときには、「ひけめ」を感じるが多かったという。まだまわりの理解も得にくかったという。しかし、自分の両親も夫の両親も子どもを預かってくれたため就労を続けることができたと言う。また地方職であり、定時で上がれる雰囲気があることが助かったと言う。実家から夕飯の品をもらって帰ることも多いと言う。やめないで就労を続けてきたから、今何とか家庭を支えられていると感じるという・仕

事はやりがいというよりは「収入」のためである。

二男が生まれてからは、子育ての要領も分かってきて最近は子どもと家事をするのが楽しいと言う。長男が台所に立ちたがるので、時間がかかっても一緒に夕飯をつくることもあると言う。(休日) 平日は仕事に追われているが、休日に子どもと一緒に何かをすることが今の息抜きであると言う。

F (20代前半) さんのあらまし

筆者の地元の知人である。今でも頻繁に連絡を取り合うほどでもないが今回 facebook に申請が来たことにより F さんの動向を知っていた。卒論のインタビューとして facebook を通じてメッセージを送り、地元の公園で再会した。直接会うのは、高校卒業時の中学同級生の同窓会以来である。

2月9日 13時～15時 子どもを遊ばせながら

・本人の就労状況

専業主婦 高校卒業後派遣社員として就労する。19歳の時に妊娠が分かり、同い年の彼氏と結婚する。(二十歳になり次第入籍) 昨年離婚し現在は実家に住む。

・家族構成

父(50)・母(49)・本人・女の子(2歳)で暮らす。Eさんには妹(20)がいるが、現在は実家を出て一人暮らしをしている。(アパレルの販売員をして自活している)

・生計について

父が主な生計をたて、母がフルタイムパートとして働いている。Eさんは家事と育児を家庭の中で行っている。現在は就労をしておらず、家事と育児で手がいっぱいだという。

・交友関係

地元で暮らすため、友人はいるが皆忙しそうに残念であるという。

現在、新しい彼氏がいて母親に子どもを預けてデートに出かけることもある。

彼氏は子どもの存在を知っており、将来的には結婚も考えている。

・母親像

自分がしっかり愛情を込めて育てるのが一番大切。

子どもには父親が必要だと思うから探してあげたい。

先のことは正直分からないし、あまり考えたことはない。

今で精いっぱいである。子どもには、勉強とかよりもたくさん友達を作ってほしい。

自らの両親には、感謝している。どうしたら恩返しができるか考えている。

● 「1970年代の母親像」と自己の社会的状況からつくり出す「自らの母親像」

自らの人生経験・状況に応じてそれぞれ就労や子育てについての理想の母親像を築いていた。母親・妻・社会人・幸福度をそれぞれ 10 点満点で評価してもらった結果はつぎのようになった。

調査者	母親	妻	社会人	幸福度
A	7	4	2	10
B	6	6	0	9
C	6	3	0	10
D	6	4	7~8	9
E	6	3	6	8
F	8	居ませんけど	4	6

調査者たちに対しては、様々な話を聞き最後にこの質問に答えてもらった。それぞれの点数から満点にするためには何が必要なのかを聞いていく手法を用いた。

<母親像への検討>

A 「満点？子育てするようになったらわかるよ。私は満点にもっていけないし、持っていく気もないの。どっぷり母にどっかでなりたくないんだよね。これぐらいが私にはちょうどいいの。」

B 「まだ子どもが2カ月で寝られないからかな。心に余裕がないと思うんだよね。家事も育児もだらだらやってて、どこかで区切れるわけじゃないしね。泣き止まないといライラしちゃうし。もっと広い心になりたいとは思っただけだね。今この点数をあげようとしたら私もうだめだと思う。でも、もっと優しい心になりたいな。」

C 「満点にするためにかあ。一生できない気がする。私は、家のことも自分のことも子どものこともまだまだだと思っの。今の目標は余裕を持って行動できるようになることかな。家事も育児もしっかりできるママになりたいからさ」

D 「個の地域は近くに祖父母がいる子ども多いからそれがうらやましいかな。いい意味で子どもを甘やかせてあげる人が欲しいな。とりあえず今年は手の込んだ手料理を頑張ってみようかな。あとは仕事を断ること笑そしたらもっと時間作れるものね。」

E 「難しいこときくね。点数なんて今はこうだけど明日にはどうなるかわからないわよ。息子怒った後はきっと自己嫌悪するからね、きっと一点だし。でもそうだな。もっとゆっくり時間が欲しいかな。ゆっくり子どもを見たいときがあるかな。でも、うちは私が働かないと厳しいからね。フッコちゃんは、そういう旦那さん見つけるのよ。まあ私は旦那さん大好きだからいいんだけどね。」

F 「いまだに夜泣きされるとつらいよ。満点にするには、私のこと解放してくれた時だ
と思う。でもこの子がいなきゃ生きていけない。変だよ。家事をしながら子どもと二人
っきりのときはつらくなる。家族がいてくれたから頑張れるんだと思う。ママは私しかい
ないしね。とりあえずもっと母親っぽくならなきゃね。」

インタビューした母親たちはそれぞれ、学歴も職歴も結婚のタイミングも異なる。しか
し、個々人の中には「自らのこうありたい母親像」を見ることができた。Aさん・Bさん・
Cさんは、同じ専業主婦でありながら「母親像」が異なっていた。

Aさんは子供中心な生活から意図的に逃れられる空間を求めている。しかし、自らの母
親規範に対してはあまり疑問を抱いていない。色々な人・選択があつていいのだけれど私
は「幼少期は母親の手で育てたい」という思いや「家族の幸せを一番に考えていきたい」
という思いと、「考えなきゃいけないのだろうな」ととらえる思いもあるようだ。子どもの
母親である自分とママ友と話しているときの自分と筆者と話しているときの自分、旦那さ
んと話している自分が異なることを意識的にとらえていた。

Bさんは、幼少期の母親以外の手でケアされることに肯定的であるが、夫の強い希望と
自分もそうかなと感じることから、しばらく就労は考えていないと言う。しかし「夫は外
で働き、妻は家庭を守るのが理想」「母親が外で働くと乳幼児期の子どもはつらい思いをす
る」というアンケートには「当てはまる」(五段階評価)と強い母親規範を見て取ることが
できた。Bさんからインタビューの中で見えたのは「他の子が預けられたりするのは、抵
抗がないが自分の子だと考えるとやはり母親の手が一番」という思いであった。

Cさんは、完全に就労に興味がある発言は見受けられなかった。自らが「専業主婦」に
なりたいたいと言う憧れが強かったと言っており現状に対してすごく肯定的であった。しかし、
「夫の育児強力は当たり前である」と感じている。これから子どもと一緒に成長してい
きたいと考えている。しかし、「いつか子どもが手を離れたときには新しいこと見つけな
いね」と子どもだけの自分ではないことは自明的にとらえていた。

●夫よりも子どもが優先な母親たち

母親たちは、子どもを最優先することやそのことにおける多少の我慢は当たり前である
ととらえている。さらに、夫と子どもを比較すると子どもを相対的に重視する傾向を見
て取ることができた。

A 「私ね。毎朝は朝ご飯がつくれていないの。まわりも友達はちゃんと作っているんだ
けどね。偉いなーと思っちゃう。」

B 「例えば朝ご飯はつくってあげられてないし。旦那さんは『子どもが生まれたらさすがのBも無理だよな。』』って気にしないでくれているけど申し訳なくてさ。でも内心無理だと思っている。」

C 「Bちゃん！気にしちゃダメだよ。うちは作っても忙しくて食べてかない日もあるよ。私はいま娘で精いっぱいだよ。最初の一カ月は旦那さんズルいって感じていたし。余裕を持って両立できるのが理想なんだろうな。」

D 「もはや何もしてないわよ。単身赴任先のことは何もしてないし、友人関係が長かったせいか『依存』が一切ない気がする。お互い好きなこと好きなようにしている感じかな。だから母親を満点にして社会人満点にして、それでも余裕があれば妻かな。一生回ってこない気がするわ」

E 「旦那さんが体調崩したことも気付かないぐらい、子どもで精いっぱいだったかな。この点数はなかなかあげられないな。子どもがもうちょっと手が離れたらゆっくりデートしなおすのもいいかもね。」

F 「まず見つけないとね。私には今のところ必要ないかな。彼氏は必要だけど、結婚するのは怖い。でも、ちー（娘）に父親が必要じゃないかと思う。」

以上のように、子どもが中心の母親傾向が存在した。母親たちから見て夫が不満を感じているかどうかは分からないと言いつつも、顕著な「不満」を抱く父親も見受けられなかった。男女ともに、子ども中心になることには抵抗があまりないように見受けられた。また、専業主婦のABCは夫の身の回りのことをするのは自らの仕事であるととらえている傾向が存在した。

●「社会人」という単語

私は、今回あえて何も言わず「社会人」という単語を用いた。この単語から広がる母親たちの価値観を知る為である。順に発言を見てみよう。

A 「社会人ってさどういう意味で聞いている？私は人とかかわりがあるかどうかで考えちゃうんだけど。もっとたくさんの人と話したいと言う意味でこの点数だな。」
彼女はアンケートにも「(私の生きがいは) 人に感謝される瞬間＝認められた瞬間ってことかな」と記入しており、社会の中で自分がどう生きていくかを考えている人であった。彼女は自ら外向的につながりを求めているタイプである。

B 「まだまだ働けないよな。だからそこはまずないものとして考えてるかな。」

彼女は社会人＝就労ととらえており、人とのつながりに関しては知人が欲しいと言っていた。自分から外につながりを求める気はあまりないが、知り合った縁を大切にしたいと考えている。

C 「社会人って難しいね。私きっとまだ子どもかも。」

Cさんは、社会人＝大人ととらえているようであった。Cさんはどのような人を大人だと思ふのかと聞くと「誰の為にも動ける人」だそうだ。

D 「昔は10できたことが今半分ぐらいだからこれくらいかな。でも人より仕事はしてるはず」

Dさんは社会人＝自らの職業ととらえており自明のものとしていた。

E 「失礼がないようにこなしてる。だから半分よりは上。でも総合職の女の子ほど働いているとも思えないからこのくらいかな。」

Eさんも社会人＝就労としてとらえており、自分の立場で求められていることは果たしているというスタンスであった。

F 「地域のゴミ拾いとかはしてるんだから社会人でしょ。前働いていたし。来年の夏祭りの役員だから頑張らないとね」

Fさんにとって社会人＝地域の活動に参加することであった。

この言葉から、交友関係の広がりには差があることが分かってきた。この交友関係の広がりについては考察で検討を加えたい。

●子育て支援サービスの難しさ

公的なサービスの利用についても質問をした。そこで見受けられたのは、必要なものが全く異なるということだ。

DさんとEさんにとって真っ先に必要なものは「病児保育」であった。子どもは体調を崩しやすく何度も困ったと言う声が聴けた。DさんもEさんも就学前から「一人で家で寝かせる」ということを経験している。このような中、Dさんは「保育園で気が合った人とたちと預け合いをした」という話をしてくれた。「公的なサポートに登録はしているが、毎回来てくれる人は違う。幼児期に入ると知らない人は子どもも不安がる。」とのことだった。一方で、Eさんは「祖母の旅行を中止にしてきてもらったときは申し訳なかった。」と親族に頼り切りの状態にジレンマを抱えている様子も見受けられた。

Cさんは、娘さんがまる一日排泄がなかった時に、コールセンターに電話をしたと言う。「お気軽にお電話ください。ってあるけど、実際には難しいよね。二回電話して、違う人で状況を位置から説明するのはすごく大変だったな。でも、相談したことで少し安心はできたんだけどね。もっとこう適度な人が欲しいよね。」と言っていた。「ほんのちょっと聞いてほしいときに、ほんのちょっと助けてくれるだけでいいんだよね。」という言葉が印象的である。更に彼女は「子育てサロンは怖い。もう派閥があって、行きづらいよね。」と言っていた。彼女にとって「ママだから」と無理につながることは抵抗を感じるようである。

一方でAさんは子育てサロンでも新しい出会いを見つけていた。彼女に「子育てサロンで不安を抱く人もいます」と伝えると「私は人の悪口だすなオーラ出してるのかも。あと一期一会的な感覚がすごく強いのかもね。そのひとは、一度つながったものを大事にしたい人なんだよ。」と言っていた。

Aさんは、人とのつながりを更新していき広く浅く、たまに深くしていく付き合い方を好んでおり、Cさんは人とのつながりを選択した上で深く付き合いたいタイプなのであろう。

このように現在の子育て支援サービスに対するニーズも多様化しており、人的ネットワークを増やすために子育て支援センターやサービスが充実してきたが、それは「母親同士」のつながりが多い。

人的ネットワークは、社会全体の中でもっと作って行けるのが望ましいだろう。母親たちを、「子育て中の母親」としてくくるのではなく、一人の人として受け入れていく環境が求められていると言えるだろう。

その意味でFさんはネットワークが多い。両親のネットワークに加え、かつての友人と会うこともできる環境にある。そこから広がりを見せ、夏祭りの準備を基盤に更なる広がりを見せつつある。

これから必要な、ネットワークとは母親が外に出やすい環境をつくるなかで緩やかにつながれる場をつくり出せるかどうか重要なのではないだろうか。

●子育てを「自己成長」としてとらえることで楽しむ母親たち

「私にとって子育ては」という質問に対して、

- A 「ギフト 成長」
- B 「人生の課題」
- C 「『育自』です」
- D 「自分育て・自分磨き」
- E 「自己成長」
- F 「生きがい」

と答えてくれた。彼女たちは、子育てが完全に楽しいものでも、辛いものでもないということは知っている。その中で、自らのライフコースに一途蹴る課題、自分のために必要な

存在として受け止める「子どもの価値」を見いだしていた。

●「これからどんなお母さんになりたいですか？」

インタビューの終わりにこのような直接的な質問をした。母親たちは次のように答えてくれている。

A 「そのときその人と出会えたことは会う必要があったからであったと思う。今（息子）をきっかけに出会った人は、きっと今必要な人なんだと思う。もし仮にその出会いが過去形になってもそれはしょうがないものなのかなと思う。私にとって、ママ友もフッコもメーガン（ピラティスで出会った外国人）も大事な知り合い。立場が違う人の話を聞けることがすごく幸せ。これからもそういうつながりを作っていきたい。」

B 「余裕を持って色々な広範囲で一つの考え方にとらわれず多様な考え方をとらえて解釈できる人になりたい。親の考えって子どもの考えの基礎になると思うから。色々な人と話せる場が欲しいな。でも無理をするってわけじゃなくて、今は夫が繋いでくれる縁を大切にしたいかな。身内との関係を大切に、今いる人たちを大切にしたい。」

C 「子どもだけでなく周りも自分も愉しめる人間になりたい。わたしは一つ一つのことをゆっくりだから、友達・旦那さん・趣味も自分のできる範囲で頑張りたいな。自分の人生も愉しめるひとになりたいな。まわりの人を大切にしながら自分を大切にしたい。」

D 「客観的に見たら、子どもも二人いて好きなことをして幸せだと思う。とりあえずは、子どもといる時間を増やせるように頑張ります。」

E 「一日、一日が早くて子どもをゆっくり見られないのが残念。ゆっくり成長がみられる心に余裕が持てる人になりたいな。」

F 「娘のことを愛し続けるママかな。でも、娘だけでなく周りにもっと感謝できる人になるのが理想だな。まー今は無理なんだけど。」

●インタビューから見受けられる父親の課題

専業主婦家庭では、家事育児は基本は母親がやるべきだと言う意識は強いようだ。しかし、それはその時期における必要なものとして母親たちも受け入れている側面もある。また今回インタビューした専業主婦家庭は、夫の育児強力に満足をしていた。

Dさんの家庭の場合、二人目のときに夫は育休取得を目指したそうである。しかし、実

現することはなく、Dさんは男性の育児休暇がいまだにどれほど大変かを語ってくれた。勿論女性の育児休暇もまだまだ課題があることも指摘してくれた。

以上のように、子どもだけでなく自分なりの方法で、周りと繋がりを求める姿であったり、働く女性は「時間のゆとり」を求めているのが分かる。

今日の母親たちのつくる個々の「母親像」は近代的な母親意識を否定していない。子どものために自分を我慢する自己犠牲的な態度や母性愛、子どもの問題に対する母親の責任など「近代家族」の母親規範は現在の母親にも強く内面化して見て取ることができた。

またインタビューの中で見えてきた問題点は、現在の子育て支援サービスの方向が「母親同士のつながり」を確保しようとしている点である。確かに必要なつながりではあるが、社会という広い意味でつながりを作っていくことの重要性を見て取ることができた。

今回明らかになったのは、フェミニズム的な「仕事も平等、家事も育児も平等」という価値観から見ると不平等に見える母親像であったらう。しかも現状に大きい不満が見受けられないのが特徴的である。彼女たちは、就労そのものに価値を見いだしているわけではないことが分かる。

考察 迷走する制度と立ち上がる母親たち

現状として、女性の多くが一度退職してその後アルバイトやパートで労働市場へ戻ってくるというものがある。男性一人の収入では厳しく、保育園や親族に頼りながら就労する母親も存在する。このように、女性就労という側面から見ても課題が多いことが分かる。一方で日本人女性の抱く今日の「母親像」にはかつての近代的家族の母親像が「母親規範」として色濃く残っていることをインタビュー調査からも見て取ることができた。このような現状が、母親の就労継続につながっていかない背景にはあることは理解できる。

母親たちのアイデンティティに注目すると「母親でない自分」を持つことはもはや当たり前のものとして受け入れられている。インタビュー調査のなかでは、「母親たちの孤立」という印象はあまり受けない。むしろ人とのつながりを求めている印象を受けた。しかし、その繋がり方が多種多様に映った。

この繋がり方も現在の母親の特徴があるようだ。

●新しい可能性

浅野が指摘する「親密性」と「公共性」の概念を用いる。

人間関係のタイプを二つに分けて捉える。

- ①友人・恋人・親子関係のような「親密な関係性」
- ②理念や利害でつながる関係

今の人間関係は①親密な関係性の濃厚化が進行してきている。これまで母親像に当てはめてきた多面的アイデンティティ・状況志向は①にのみ適応される。その意味でこれまでの伝統的な公共性は衰退する可能性があると言える。しかし他の領域への公共性の可能性は否定できないし、このような多様化した世界で特定の理念・利害を共有することが困難である。

さらに「結束型社会関係資本」と「架け橋型社会関係資本論」の概念をとらえる。結束型社会関係資本とは、人間関係が基本的に生活空間を比較的広範囲に共有する、同質的な人々間の関係が持つ有用性である。

他方、架け橋型の社会関係資本とは、より異質性の高いもの同士の関係が生み出す有用性のことである。

私と今回インタビューした女性たちとの関係はこの「架け橋型」でとらえることができるだろう。私が自らつながりを求めなければつくることのできなかつた関係である。

他方、子育て支援事業は「結束型」が多い。「地域」の「母親」たちをむすぶのだから必要なものである。子育てサロンの意義は勿論あるだろう。しかし「架け橋型」の支援は少ないのではないだろうか。そして、現在の母親に必要とされているのはこの「架け橋型」の充実であるともいえる。自分と合った人と自分と合った距離でつながるところから始めたいという母親は多いだろう。

●流浪する社会と新しい連帯の可能性

消費社会には「個人化」する力が働く。しかし②の理念・利害（例えば趣味）を共に共有する機会があれば個人化を防ぐことができる。さらに、その②が存在する間は連帯力を生み出し、異質な他者との関係から新たな親密圏を構築する可能性を持つ。時に生じる葛藤は、自分とは異なる価値観を持つ他者と共存するためのルールを学ぶことができるだろう。しかし、②内で必ず葛藤が生じるとも限らず自閉集団に陥る可能性も内蔵する。

このような関係はすでに現在の母親たちのコミュニケーションにも表れているのだ。それぞれの状況で必要なニーズは異なる。だからこそ、適度につながりたいと言う思いをもった人々に対して上手につながりを作れることが求められるのである。

インタビューにおいてAさんとCさんは、その意味で真逆であると言える。Aさんは自らつながりを求めて行動を起こすことができる。しかしCさんは少し受け身のつながり方である。ただCさんは知人の広がりや子育てテレフォンの利用など自らの必要に応じて、外部とのつながりを求めている。

今後支援が求められるのは、つながりの多様化とともに、つながりを求めて発信できるような場づくりなのだろう。今後の社会において、難しいのは発信する強さは置いておいても「自発的に」外と繋がろうという姿勢がないとどんどん孤立していくという状況である。

現状では、消費社会の「自己選択→自己責任」の論調の中で、子育ての閉塞性は残存し

ている。このような中で、子育てを一人で抱え込む母親へのアプローチが難しいものとなっている。だからこそ、子育てと離れる「リフレッシュ」の時間を設けることは重要な意味をもつ。そのような時間に趣味・関心を消費社会の中で見つけ、そこから広がる可能性を信じたい。

今日の母親は、浅野（2008）が指摘する若者アイデンティティでとらえることが可能である。しかしジェンダー論の発展の中で生きてきた現在の母親たちは、母親以外の自分を追求することを自明的にとらえ、さらに自らが閉鎖的空間に入っていく危険性を知っている。だからこそ、自分なりの方法で解決策を見つけようとしているのだろう。

●新たな雇用創出を目指して

今日、「ママ起業」という取組があるのをご存じだろうか。自らの趣味を延長し、それを仕事にしようとする動きである。この動きは、自分のやりたいことを仕事にしたい・母親もしっかりこなしたいという母親たちが、自らの雇用を自らで作り出そうとする動きから発展してきたものである。時間的制約が大きい母親・やりがいを求める母親たちが動き出したと言えるだろう。

もちろん、必ず成功するわけでもなくリスクも存在する。しかし、今日の母親は金銭より、他者からの承認を求めて動いているともいえるだろう。

物質的豊かさとある程度の家計基盤があることが前提ではあるが、「専業主婦」を市場に参入させるための新たな取り組みとしては今後注目していくべきであろう。

参考文献

内閣府 (2010)

「平成22年度版 子ども・子育て白書」

内閣府 (2012)

「平成24年度版 子ども・子育て白書」

田中恭子 (2009)

「保育と女性就業の都市空間構造 スウェーデン、アメリカ、日本の国際比較」

遠山哲夫 (2008)

「北欧教育の秘密」

高岡 (2011)

「日本はスウェーデンになるべきか」

湯本健治・佐藤吉宗 (2010)

「スウェーデン・パラドックス」

大和礼子・斧出節子・木脇奈智子 (2008)

「男の育児・女の育児 家族社会学からのアプローチ」

柏木恵子 (1993)

「父親の発達心理学—不正の現在とその周辺」

船橋恵子 (1998)

「現代父親役割の比較社会的検討 『父親と家族—父性を問う』」

斧出節子 (2007)

「父親の育児に関する意識の諸相—なぜ育児をするのか」『華頂短期大学研究紀要』

牧野カツ子・渡辺秀樹・船橋恵子・中野洋恵 編 (2008)

「国際比較にみる世界の家族と子育て」

井上 輝子・江原由美子 編 (2010)

「女性のデータブック第4版」

古市憲寿 (2011)

「絶望の国と幸福な若者たち」

青島祐子 (2007)

「新版 女性のキャリアデザイン」

落合恵美子・山根真理・宮坂靖子 編 (2007)

「アジアの家族とジェンダー」

上野千鶴子 (2011)

「ケアの社会学 当事者主権の福祉社会へ」

普光院亜紀 (2007)

「変わる保育園 量から質の時代へ」

普光院亜紀 (2012)

「日本の保育はどうか一幼保一体化と「子ども園」への展望」

汐見稔幸・近藤幹生・普光院亜紀 (2005)

「保育園民営化を考える」

汐見稔幸 (2003)

「世界に学ぼう！子育て支援」

近藤幹生 (2006)

「保育園と幼稚園が一緒になるとき 幼保一元化と総合施設構想を考える」

近藤幹生 (2010)

「保育園『改革』のゆくえー『新たな保育の仕組み』を考える」

柏木恵子 (2011)

「父親になる、父親をする一家族心理学の視点から」

森田明美 編 (2000)

「幼稚園が変わる 保育所が変わるー自治体初；地域で育てる保育一元化」

白井千晶・岡野晶子 編 (2009)

「子育て支援 制度と現場ーよりよい支援への社会学的考察」

宍戸健夫 (2011)

「保育の散歩道」

諏訪きぬ 監修 (2011)

「保育における感情労働 保育者の専門性を考える視点として」

西郷泰之 (2011)

「家庭訪問型子育て支援『ホームスタート』実践ガイド」

矢澤澄子・国広陽子・天童睦子 (2003)

「都市環境と子育て」

船橋恵子 (2006)

「育児のジェンダー・ポリティクス」

足立幸男・森脇俊雅 (2003)

「公共政策学」

荒井冽 (1988)

「新世代の保育をデザインする」

白石淑江 (2009)

「スウェーデン保育から幼児教育へ 就学前学校の実践と新しい保育制度」

Barbara Martin Korpi 太田美幸訳 (2010)

「政治の中の保育 スウェーデンの保育制度はこうしてつくられた」

田中恭子 (2009)

「保育と女性就業の都市空間構造 スウェーデン、アメリカ、日本の国際比較」

浅井春夫・丸山美和子（2009）

「保育の理論と実践講座第3巻

子ども・家族の実態と子育て支援—保育ニーズをどうとらえるか」

前田正子（1999）

「少子化時代の保育園—今、何を変えるべきか」

安梅勅江（2004）

「子育て環境と子育て支援 よい長時間保育のみわけかた」

駒崎弘樹（2011）

「『社会を変える』を仕事にする：社会起業家という生き方」

小澤徳太郎（2006）

「スウェーデンに学ぶ『持続可能な社会』」

北岡孝義（2010）

「スウェーデンはなぜ強いのか 国家と企業の戦略を探る」

ケント・エリクソン（2012）

「スウェーデンにおける施設解体と地域生活支援」

広井良典（2006）

「持続可能な福祉社会」

仲間真一・鷺尾梓（2010）

「仕事と子育て男たちのワークライフバランス」

佐藤博樹・武石恵美子（2004）

「男性の育児休業」

恒吉僚子（1997）

「育児の国際比較 子どもと社会と親たち」

天童睦子 編（2004）

「育児戦略の社会学」

賀茂直樹（2012）

「社会保障の哲学 日本の現状を把握し、未来を展望する」

大日向雅美（2005）

「『子育て支援が親をダメにする』なんて言わせない」

杉山千佳（2005）

「子育て支援でシャカイが変わる」

落合恵美子（1994）

「21世紀家族へ（第3版）」

最後に

マクロな世界でみてみれば、経済状況・雇用問題には山ほど課題は残るし、ミクロな世界では家事・育児の分担方法・子育て環境の未整備による苦勞も多数残っている。

また日本においても再び賃金格差の広がり指摘されている。そして日本では子育て費用の個人負担が多く、子どもたちの「機会」が親の収入によって左右されてしまう現状が明らかにされつつある。

子どもは親を選べない。だからこそすべての子が発達の保証がされるべきである。本論文では、今日の母親たちが「子育ては家族のもの」という考えを抱いていることを明らかにしてきた。この「育児は私的なものである」という考え方が日本で急激に変わることはないだろう。しかし、だからと言って放置するわけにもいかない。

日本でも、多様な選択肢が取れるような制度支援は必要であろう。その際、やはり必要となってくるのは「制度を個人単位」で扱うことであろう。価値観の多様化を認めながらも家族に縛るのは間違っている。「伝統」という言葉で家族を縛るのをやめれば、新しい家族が姿を現すだろう。

一方でミクロな単位では、アイデンティティの在り方が現在の制度をつくり出している人々と異なる可能性を指摘する。今日の母親は、決して怠けているのではない。ジェンダーバイアスの中で育児・子育て・社会とのかかわり方という面で試行錯誤を繰り返しているのである。

消費社会の可能性

今日の母親たちに必要な「育児ネットワーク」の一つに適度な距離の「架け橋型」ネットワークの必要性を示した。

インタビュー調査をさせていただいた6人の女性は、筆者にとって「親友」とは異なる。しかし「知人」ほど遠い存在でもない人々だ。

Aさんとは息子さんの幼稚園の選択の悩みを聞いたり、私の恋愛相談をするといういわゆるプライベートについての話もする。しかし、これからどうやって生きていけばいいかといった、いわゆる「真面目な話」も真面目にできる間柄である。

BさんとCさんは筆者のサークルのつながりから生まれた付き合いである。次回集まる時にはサークルの思い出話をたくさんする約束をしている。二人のお子さんという存在が筆者と結びつけてくれたが、BさんとCさんにとって筆者は「夫の後輩」と「新しいママ友」だそうである。

Dさんは教授と学生の間柄でもあり、お子さんを預かる学童では「保護者」と「学童の先生」である。

Eさんから見ると「息子の遊び相手」であり「適度な距離の妹」だそうだ。

Fさんからは「昔の友人。今の知人。」と言われた。

どの人も、筆者にとってかけがえのない恩人であるが親密さで言ったらほどほどの人々

である。しかし、少しずつ関係が強化されている付き合いもある。今後どのような関係へと変化していくかは、筆者も分からない。

しかし、SNSやメールなど今日では「つながり」を維持することは容易となった。このような適度の距離のつながりが子育ての世界にもっと広がっていくことを期待したい。